

津久見市の小児医療・小児保健の向上を目指して

こどもの病気対策法⑨⑨

―夜間のこどもの発熱(フローチャート改訂版)―

大分大学地域医療・小児科分野 是 松 聖 悟

津久見市の皆様は2008年よりお伝えしているこのコーナーも第99回目を迎えました。当時作成して、子どものおられるご家庭に配布した津久見市の「こどもの病気とその対策法」フローチャート「も見直しが必要な時期と考え、今回はまず、発熱時の家庭での対処法について、改訂版をお伝えします。」

子どもが発熱したときの観察項目として大切なのは、何℃ではなく、「機嫌が悪い」、「活気がない」、「具合が悪い」です。夏場は、気温の影響を受け、機嫌が良く活気もあるが体温は高いということがあります。まずは服を着せすぎているか、部屋が暑すぎないか確認し、安静にさせて30分後に再度検温をしてみてください。それで38℃以上ある場合、次に年齢により道が分かれます。生後3か月未満であれば、すぐにこども救急電話相談(＃8000)に電話して指示をもらって下さい。生後3か月以上であれば、「機嫌」、「活気」、

「具合」を確認して、悪ければ解熱剤を使用して30分観察し、その悪い状態が改善しないならば(＃8000)に電話して指示をもらってください。

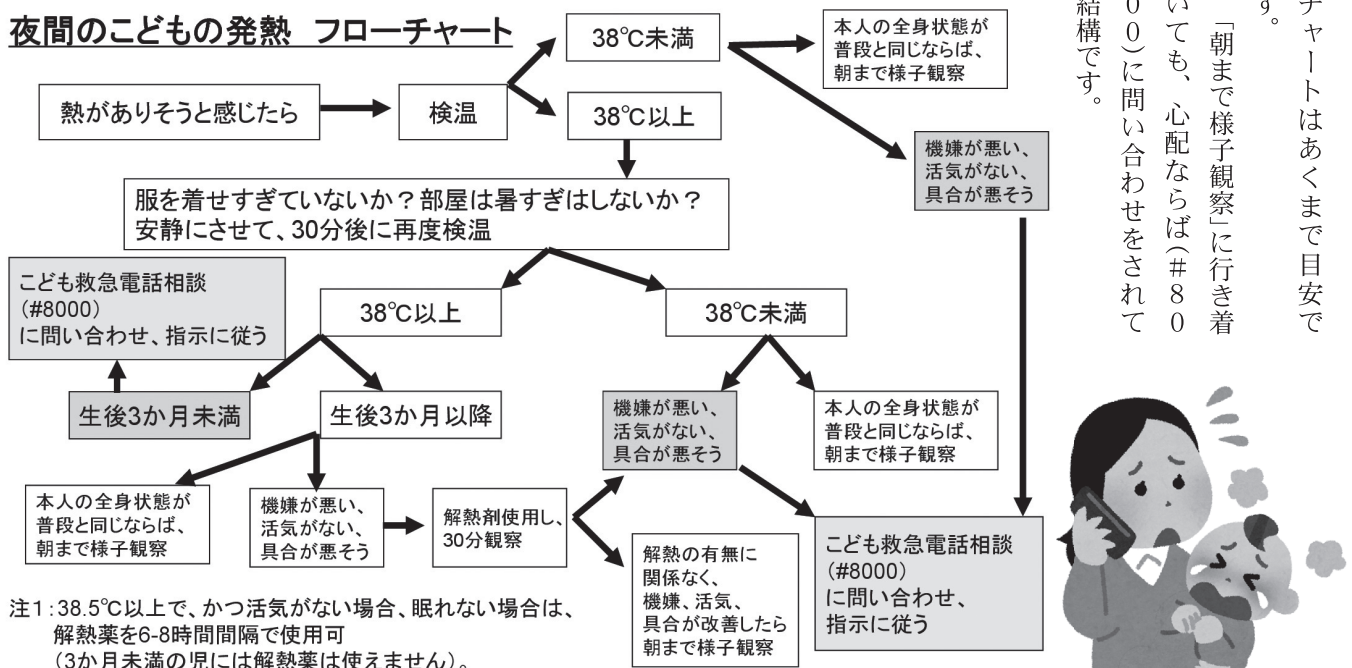
実は、発熱の有無よりも、「機嫌」、「活気」、「具合」が優先されますので、平熱でもこのような状態であれば、(＃8000)に相談してください。いずれも満たさない場合は、翌朝まで観察して、かかりつけのお医者さんに診てもらってください。

「熱の高さよりも、機嫌、活気、具合、そして生後3か月未満かどうか病院受診のポイント」であることをしっかりとインプットしていただきたいと思っています。

これは夜間に限らず、日中も適応できることですが、夜間に慌てないよう、病院やクリニックが開いている時間に備えて解熱剤のストックを処方していただくことをお勧めします。

もちろん、このフロー

夜間のこどもの発熱 フローチャート



注1: 38.5℃以上で、かつ活気がない場合、眠れない場合は、解熱薬を6-8時間間隔で使用可(3か月未満の児には解熱薬は使えません)。
注2: このフローチャートはあくまで目安です。心配ならば＃8000に問い合わせを。
注3: 夜間、このチャートを見て悩むことがあれば、翌朝は必ず受診してください。

